二国間交流事業 セミナー報告書

令和5年4月24日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
京都大学大学院文学研究科
[職・氏名]
准教授・児玉聡
[課題番号]
JPJSBP 220214403

1. 事業名 相手国:オランダ(振興会対応機関:NWO)とのセミナー

2. セミナー名

(和文) 日蘭における高齢社会と終末期医療の倫理的・法的・社会的・歴史的側面の国際比較研究

(英文) Interdisciplinary Perspectives on the Ethical, Legal, Social and Historical Aspects
of Aging Society and Terminal Care in Japan and the Netherlands

3. 開催期間 2023年 3月 14日 ~ 2023年 3月 18日 (5日間)

4. 開催地(都市名)

京都市

5. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Baar Monika (Leiden University, Professor of Central European Studies)

6. 委託費総額(返還額を除く) 2,351,250 円

7. セミナー参加者数(代表者を含む)

	参加者数	うち、本委託費で渡航費または 日本滞在費を負担した場合*
日本側参加者等	12名	0名
相手国側参加者等	10名	0名

参加者リスト(様式B2)の合計人数を記入してください。該当がない箇所は「0」または「-」を記入してください。

* 日本開催の場合は相手国側参加者等の日本での滞在費等を負担した場合、相手国開催の場合は日本側参加者等の渡航費を委託費で負担した場合に記入してください。

8. セミナーの概要・成果等

- (1) セミナー概要(セミナーの目的・実施状況。第三国からの参加者(基調・招待講演者等)が含まれる場合はその役割とセミナーへの効果を記載してください。関連行事(レセプション、見学(エクスクーション)その他会合(別経費の場合はその旨を明記。))などがあれば、それも記載してください。各費目における増減が委託費総額の50%に相当する額を超える変更があった場合には、その変更理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。)

・セミナーの概要

オランダの終末期医療については、医師が患者に致死薬を処方し患者が自殺するのを助ける医師幫助自殺や、致死薬を投与する積極的安楽死が合法化されていることは日本でもよく知られている。しかし、安楽死の合法化と同時に行われた緩和ケアの推進については日本ではあまり紹介されることがなく、終末期医療全体の実像がわかっていない。一方、日本では、終末期医療や安楽死に関する法制化の議論は進んでいないものの、オランダ人研究者からは、世界一の高齢社会である日本の終末期医療や家族も含めた共同意思決定のあり方、さらに海外から評価の高い介護制度の実態を知りたいという声もある。また、障害学の見地からは、オランダと日本において、終末期医療や安楽死の議論において障害者団体が果たす役割の比較という点も両国の研究者の関心の高い事項だと考えられる。さらに、今般の COVID-19 パンデミックにおける終末期医療の対応においても、高齢者や障害者といった社会集団が日本とオランダでどのような(差別的)扱いを受けたかについても、双方の国の研究者の関心は高い。

そこで、本研究では、オランダと日本の人文社会科学系の研究者および医学系の研究者が一堂に会し、両国における高齢社会および終末期医療に関連する様々な倫理的、法的、社会的問題を議論する二国間セミナーを実施することにより、研究者間での問題意識と情報の共有を行い、今後の継続的な国際研究の土台を築くことを目指した。尚、本セミナーはすべて、対面とオンラインのハイブリッド形式とすることで、感染症対策及びスケジュールの関係で現地に来ることのできない参加者に配慮して開催した。

・各日の内容

【3月14日:総論 日蘭の終末期医療に関する基本的な情報の共有(一般向け公開シンポジウム)】

日本とオランダの高齢化社会と終末期医療の現状について、総論的にセミナー参加者が報告を行い、質疑応答を通じて情報と問題意識の共有を行った。本シンポジウムは、セミナー参加者だけでなく広く一般に公開し、議論や意見交換の機会とした。また、シンポジウム開催後にはレセプションを開催し、シンポジウムでは扱いきれなかった論点について、より深い議論と今後の研究のためのネットワークづくりの機会とした。

【3月15日:各論】

各論として、「終末期医療における倫理」及び「「よき死(good death)」に関する文化的諸相」という二つのテーマについて発表および議論を行った。前者に関しては、とりわけ安楽死を含めた終末期医療の意思決定において、高齢者や障害者が社会的な圧力によって治療中止や安楽死を選ばされているのではないかという問題について、さらには、高齢者や障害者の社会的受容のふさわしい方策について、積極的に議論が行われた。後者に関しては、日本とオランダの医療・介護に影響を与えている文化的要因をめぐって、とくに宗教と家族の役割について報告と議論が行われた。その結果、宗教団体が運営母体に関連している医療機関やホスピス(多くは緩和ケア病棟)におけるケアを除けば医療機関への宗教的関与はあまり見られない日本の状況と、臨床宗教師やチャプレンといった宗教者が医療機関等でスピリチュアル(霊的)ケアを提供する活動が行

われているオランダの状況との異同、さらには、終末期医療の治療方針の決定に関して家族の意向が重視される日本の状況の特異性などが明らかになった。また、昼食・夕食時も活用して会議を行い、ワークショップで発見された諸問題についてより深い議論を行い、今後の研究のためのネットワークづくりの機会とした。これらのレセプションは、とりわけスケジュールの関係で途中で帰学する必要のあった参加者にとっては、貴重な機会となった。

【3月16日:エクスカーション】

日本における終末期の医療・ケアがどのように提供されているのかをオランダの研究者らに知ってもらい、日本の研究者との議論を深めるために、日・蘭の研究者とともに、京都市左京区にある「日本バプテスト病院」のホスピス・緩和ケア病棟を視察した。

【3月17日: 共通の課題とお互いから学ぶべき教訓の探究】

これまでの二日間の報告と議論を踏まえて、日本とオランダの両国が直面する共通の課題について確認し、同時にお互いから学ぶべき教訓を探究することで、今後の終末期医療の共同研究に発展可能なシーズを見つける作業を行った。また、昼食・夕食時も活用して会議を行い、ワークショップで確認された教訓について、打ち解けた場での真剣な議論を行い、今後の研究のさらなる展開について意見交換を行った。これらのレセプションは、新たな論点の探究と本研究の次の発展を模索するうえで、重要な機会となった。

(2) 学術的価値(セミナーにより得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

一週間にわたる学術交流により、オランダと日本における終末期医療(緩和ケアや安楽死、事前指示を含む)の実態や歴史的経緯の共通理解が深まった。とりわけ、緩和ケアやチャプレンにとって重要なスピリチュアルペインの問題について、先進的と考えられているオランダでも課題が多いことがわかり、日本と継続して比較研究を行う意義が確認された。

(3) 相手国との交流(両国の研究者が協力してセミナーを開催することによって得られた成果)

日本における一週間のセミナー開催により、オランダ人研究者の日本の文化理解が大きく進展し、また日本人研究者も文献では知ることが困難な安楽死やスピリチュアルケアの実状などを知ることができ、研究上の大きな成果が得られた。また、食事やホスピス見学を共にすることで親睦が深まり、今後、オランダの NWO の研究費の申請を行って研究を継続しようという話が進んでいるのも大きな成果と言える。

(4) 社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

高齢社会において、ますます終末期医療や介護の問題は重要となっており、「よい死」や「死の質」が各国で問題になるなか、こうした問題に関する日本とオランダの経験や課題を共有することは、両国のみならず他の国々にとっても大きな意義のあることである。とりわけ、オランダにおける安楽死や緩和ケアの立法過程に関する議論や、終末期における深い鎮静を使わないで平穏な死を迎えることに成功している日本のホスピスケアなど、相互の学びが大きかったと言える。こうしたテーマを引き続き研究することが、終末期に関わる医療や介護の質を向上させることにつながる事が期待される。

(5) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

本ワークショップ開催に当たっては、日本・オランダ両国の博士号取得前後の大学院生・PD 研究者らにセミナーの企画・準備に携わってもらい、今後の国際交流の機会を提供した。その結果、日蘭の若手の研究者の間で、終末期医療をめぐる法的・社会的・倫理的課題に関する研究者ネットワークが形成され、今後、彼らを主体とした研究課題を進展させていくことも確認された。

(6) 将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

本研究は、日蘭の終末期医療や介護の場面における様々な倫理的、法的、社会的問題を、研究者間で共有し、今後の継続的な国際研究の土台を築くことであったが、この目標はおおむね達成され、この研究者ネットワークを活用することで、オランダの NWO の研究費に新たに申請することで意見が一致した。今後は、日蘭の比較検討にとどまらず、英国などのヨーロッパ各国の研究者にも加わってもらうことで、今回見出された、「終末期医療における倫理」及び「よき死に関する文化的諸相」という問題に関して、一層の調査を進めたいと考えている。

(7) その他(上記(2)～(6) 以外に得られた成果(論文発表等含む)があれば記載してください)

該当なし